

「さかさまに行かぬ年月よ」

― 試楽の夜の光源氏 ―

西 木 忠 一

一

二月十余日に予定されていた朱雀院五十賀は、紫の上の病臥・女三の宮の懐妊・明石女御の出産などにより遅延に遅延を重ねて、最終的には十二月二十五日と決定した。予定時期から十か月の延期であった。

そこで、十二月十余日を試楽の日と定めて、「舞ども馴らし、殿の内ゆすりののし^(注1)」^(注1)っている。紫の上・明石女御・玉鬘などが参集して、六条院はいまとりわけ殷賑をきわめている。ただ、花散里は大将の君(夕霧)が「丑寅の町にて、まづ内々に、調楽のやうに」遊び馴れているので、試楽には参加しないという。そうした盛儀にはなるべく参加を控えようとする、いかにも花散里に相応しい対応であるといえよう。

衛門督(柏木)には

(1) かかる事のをりもまじらはせざらむは、いとほえなくさうざうしかるべき

(2) 人、あやし、とかたぶきぬべき

との光源氏の心配りから、「参りたまふべきよし」の使いがあった。右二項中、特に光源氏が心を用いたのは(2)であった。光源氏は世人が「あやし」と訝るのを回避しようとする。ところが、柏木からは「重くわづらふよし申して」の辞退が届き、受けた光源氏は「思ふ心のあるにや、と心苦しく思して」強いて消息を遣る。光源氏には柏木の胸中がはかれる。だから、柏木辞退も納得できるものの、柏木を「心苦しく思す」光源氏でもあった。光源氏にはそれだけの余裕があったわけである。

柏木の病因を知らぬ父大臣は

などか、返さひ申されける。ひがひがしきやうに、院にも聞こ

しめさむを、おどろおどろしき病にもあらず、助けて参りたまへ。

と勧める。「とり分きて」の光源氏からの消息に恐縮したであろう父大臣は、「ひがひがしきやう」に光源氏に判断されることを特に危惧する。ひねくれ者と見られては、柏木の将来に大きな障害として光源氏が立ちはだかるに違いない。だから、「助けて参りたまへ」と半ば強要の勧めとなった。柏木が意を決して試案参上に至ったのは、父大臣のこうした思いがあったからである。

彼は光源氏への恐懼に身を縮めつつ、心ならずも六条院への道を辿るのであった。それは重い足取りを励まし続けた参上であつた。

二

物語は場面を六条院に移す。

まだ、上達部なども集ひたまはぬほどなりけり。

と語り出される。諸注釈がこの一文からを改行して段落を改めることに疑義を抱く説も見える。この一文を、前文「……苦し、と思ふ思ふ参りぬ」の「説明として付記されたもの」とするわけである。

「第一の招請状には、微妙な心理の高揚があつた」筈であり、「とり分きて」の消息には、柏木を早々に引っぱり出す何ものかが、その文中・文外にあつたと見なくてはならぬ」^(注2)とする。

だが、私は諸注釈に従つて改行する立場を採る。つまり、柏木の意志を考慮に入れるからである。

まだ上達部たちが参上しない間に柏木は六条院に到着した。「まづ源氏と二人だけの対面をしておいたほうが無難と考えた」^(注3)らしい。光源氏の視線を極度に意識する柏木には、他の上達部たちの蔭に潜むよりも、まづ光源氏に目通りを果たしておく方がより得策と考えたのだ。恐怖が生んだ柏木苦肉の策であつた。

柏木を常の如く「近き御簾の内」に迎え入れた光源氏は、「母屋の御簾をおろしておはします」「おはします」と最上敬語を用いて作者は準太上天皇光源氏の威厳を誇示する。光源氏が柏木をそば近くに招じ入れようともし厳然と存在する光源氏の尊厳は微塵もゆるがない。これだけでも既に柏木にとっては多大の威圧となつて迫つて来た筈である。

げに、いといたく瘦せ瘦せに青みて、例も、誇りかに華やぎたる方は、弟の君たちにはもて消たれて、いと用意あり顔にして、めたるさまぞことなるを、いとどしづめてさぶらひたまふさま、などかは皇女たちの御傍にさし並べたらむにさらに咎あるまじきを、……。

と物語は続く。元来、落着きを失せぬ柏木であるが今日は特に「いとどしづめてさぶらひたまふ」様子である。それは皇女の婿君として見てもいささかの遜色もないと光源氏は見ているという。

とはいへ、「事のさま」つまり今度の密事が、当事者一人に、自分を無視した仕打ちだと考えるゆえに、「罪ゆるしがたけれ」とする光源氏なのである。だが、彼は「さりげなく、いとなつかしく」柏木に語りかけた。彼の腹芸は見事だといえよう。自分も若き日に

犯した罪。それを柏木の場合には「ゆるしがたけれ」とする。その時の光源氏の形相はいかばかりであったことか。そこを「さりげな」さを装う光源氏は、やはり只者でない。

彼は柏木に語りかける。

その事となく、対面もいと久しくなりにけり。

とまず無沙汰をその糸口にして、「いとどしづめてさぶらひたまふ」柏木の緊張をほぐすかに見える。そして、いよいよ本題に移る。

月ごろは、いろいろの病者を見あつかひ、心の暇なきほどに、院の御賀のため、ここにもしたまふ皇女の、法事仕うまつりたまふべくありしを、次々とどこほること繁くて、かく年もせめつれば、え思ひのごとくしあへで、型のごとくなん齋の御鉢まゐるべきを、……。

「ここにもしたまふ皇女」つまり女三の宮、その父朱雀院のための法事が、「次々とどこほること繁く」て、今になつたという。「とどこほ」つた原因の一つに女三の宮懐妊があつた。光源氏栄華の殿堂六条院において、女三の宮懐妊は一大慶事であろうというのに、当主の光源氏は双手をあげて欣喜できない。いま彼の目前に冷静に控える柏木ゆえの懐妊と思えば、光源氏には言語に絶する思いが胸中に渦巻いていた筈である。「型のごとくなん齋の御鉢まゐるべき」と、いかにも主人側の謙虚な姿勢を見せるようでありながら、それをひたすら威儀を正して拝聴する柏木には、瞬時とて心許さぬ思いが満ち満ちていた。

「家に生ひ出づる童べの数多く」に舞などを習得させて見せよう

と思うものの、「拍子ととのへむこと、また誰にかはと思ひめぐらしかねてなむ」柏木を迎えるに及んだと光源氏は語った。これで柏木を迎えた理由が判明した。光源氏は柏木の音楽の伎倆を高く評価していたのである。常であれば大いに満悦というのが柏木の心情であつた筈である。

月ごろとぶらひものしたまはぬ恨みも棄ててける。

と結ぶ光源氏の様子は「うらなきよう」である。さりげなく光源氏は日頃の無沙汰を水に流すという。しかし、それを聞く柏木は恐懼に戦っていたことであろう。

いといと恥づかしきに、顔の色違ふらむとおぼえて、御答へもとみに聞えず。

というのが柏木であつた。「さりげない」光源氏の態度は、却つて柏木を過度に萎縮させずにおかなかつただろう。やつと柏木は開口に至る。

月ごろ、方々に思し悩む御こと承り嘆きはべりながら、春のころほより、例もわづらひはべる乱り脚病といふものところせく起こりわづらひはべりて、はかばかしく踏み立つることもはべらず、月ごろに添へて沈みはべりてなむ、内裏などにも参らず、世の中跡絶えたるやうにて籠りはべる。

自分の病いは「脚病」であると彼はいう。具体的な病名は彼の病いを聞き手に信じさせる。それだけ信憑性があるわけである。彼は「春のころほひ」から病んだという。柏木と女三の宮との密通は四月十余日、御禊前夜のことであつたから、その以前から「脚病」に

よって「はかばかしく踏み立つることもはべらず」の状態であったと語る。

脚気で歩けない。それで、何か月も寝たつきり。「世の中あたたえたるやうにてこもりはべる」。あの夜、柏木は思った。「いづちもくゝるて隠したてまつりて、わが身も世にふるさまならず、跡たえてやみなばや」。その心が、今、ふと口に出たのであろうか。^(注4)

との玉上琢弥氏の評に見えるごとく、柏木のわれ知らず口をついて出たのが、「世の中跡絶えたるやうにて籠りはべる」との言葉であつた。柏木は続けて、

院の御齡足りたまふ年なり、人よりさだかに数へたてまつり仕うまつるべきよし、致仕の大臣思ひおよび申されしを、冠を掛け、車を惜しまず棄ててし身にて、進み仕うまつらむにつく所なし、げに下薦なりとも、同じごと深きところはべらむ、その心御覽せられよ、ともほし申さるることはべりしかば、重き病をあひ助けてなん、参りてはべりし。

「院の御齡足りたまふ年なり」から文体一変する。話題転換である。致仕大臣が柏木に語る言葉となる。他の誰よりも「さだかに数へたてまつり仕うまつる」のが大臣自身の役目、いな朱雀院に対する報恩なのである。それが「冠を掛け、車を惜しまず棄ててし身」には今更せん術なく、そこで愛息柏木に「同じごと深きところ……」と勧めるのだと語る。致仕大臣の語りに見える「つく所なし」は『細流抄』に

致仕大臣着座せん所なしといふ説あり如何。只より所なしといへる心なるべし。

と見えるけれども、やはり「着座すべき所がない」と解して、致仕大臣の遠慮の胸中を読み取るべきであらう。

柏木は続いて朱雀院が仰々しい儀式を好まず、「静かなる御物語の深き御願ひかなはせたまは」んことを語って閉じれば、光源氏は「いかめしく聞きし御賀の事を、女二の宮の御方さまに言ひなさぬ」のを、「芳あり」と認めるのであつた。『細流抄』が、

女二宮の御賀し給ひしを、致仕大臣の取なしに言ひなして、女三宮の御賀のあるべきことをばいかめしくいへるを、源のらうありとほめて思ひ給ふ也

と注記するのに従つてよからう。

さて、そこで光源氏は

(1) 大将は、公方は、やうやう大人ぶめれど、かうやうに情びたる方は、もとよりしまぬにやあらむ。

(2) かの院、何ごとも心及びたまはぬことはさをさなき中にも、楽の方の事は御心とどめて、いとかしこく知りとのへたまへるを、さこそ思し棄てたるやうなれ、静かに聞こしめし澄まさむこと、今しもなむ心づかひせらるべき。

(3) かの大将ともろともに見入れて、舞の童への用意ばへよく加へたまへ。物の師などいふものは、ただわが立てたることこそあれ、いと口惜しきものなり。

の三点に関して語った。(1)で夕霧の無風流を、(2)で朱雀院の音楽

堪能であることを、(3)で夕霧とともに「舞の童べ」どもを指導するようにと語る。特に音楽の方面に秀でた朱雀院ゆえ、心澄まして聴かれては当然にして高い水準を求められようから、ぜひ柏木に指導を乞うという光源氏の言葉に、柏木は「うれしきものから苦しくつましく」、言葉少なに「すべり出」るのであった。

源氏と柏木との典雅な対面は、それぞれの凄絶な内面を辛うじて抑える努力によって実現されている。破綻寸前の束の間の緊張であった。^(注6)

との評言も見えるが、この対面は手に汗握る思いが柏木にはあったと思われる。今、柏木は病中である。というのに、ここまで自己抑制を効かせていたのも驚嘆の至りであるが、同程度、いなそれ以上の自己抑制を、これまた働かせて柏木に対面し語り終えた光源氏にも、さすがの思いがする。それにしても、やはり主動権は光源氏にあった。それは当然のことながら準太上天皇の貫禄には否めないものがあつた。

① 光源氏の発言「その事となくて……」

② 柏木の発言「月ごろ、方々に……」

③ 光源氏の発言「ただかくなん。……」

と三か所の会話の部分で成立している対面の場は、その発言回数に比例して光源氏の尊厳を保つものであつた。そつなく語り終えた柏木とはいえ、「例のやうにこまやかにあらでやうやうすべり出で」た柏木は、これ以外身の処し方がなかつたわけである。

三

引退って汗がひいて見れば、舞の指導に行かねばならぬのがあらためて気を重くする。鉛の巨塊を呑んだ程の重さと言つてもまだ足りないかも知れぬ。出来るものなら辞退したい、だがそれは許されない。あの密事を行なつた六条院にどの面下げてとどまつていられるのか。それに童舞の指導をすれば試楽の最後までつとめなければならなくなる。引きずり出されるようなかたちでやつと出て来たのに、弱り切つた心身がどこまでもちこたえられるか。^(注6)

と三苦浩輔氏が述べておられる。光源氏の前を「すべり出」た後の、柏木の胸中を生々しく辿つておられていて、いまは同氏のままに従つておこう。ほぼこのあたりと思えるからである。

いよいよ試楽の時を迎えた。青色の蘇芳襲の舞の童たち、白襲の楽人三十人。式部卿宮・右大臣を控えさせて光源氏は廂の御簾の中にいる。上達部は簀子に居並ぶ。

万歳楽を四人で、皇靈を一人で、続いて陵王・落躑・太平楽・喜春楽の舞の数々を、それぞれ典雅に披露した。

原文に見る、人と舞の名の煩をいとほぬ羅列は、この柏木の感覚を反映してゐる。少くとも彼の感覚を反映してゐると感ずる事を可能ならしめてゐる。^(注7)

との石田穰二氏の読みは当を得ている。柏木にとつては典雅をきわめた舞も別世界の出来事である。すべては彼の意識を上すべりして

過ぎていく。それは柏木の心を掴み取ることがない。そうした柏木の心理状態を文章は見事に語り終えているのであった。

暮れゆけば、御簾上げさせたまひて、ものの興まさるに、いとうつくしき御孫の君たちの容貌姿にて、舞のさまも世に見えぬ手を尽して、御師どもも、おのおの手の限りを教へきこえけるに、深きかどかどしさを加へてめぐらかに舞ひたまふを、(A) いづれをもいとらうたしと思す。老いたまへる上達部たちは、(B) みな涙落としたまふ。式部卿宮も、御孫を思して、(C) 御鼻の色づくまでしほたれたまふ。

試楽の夜はいよいよクライマックスを迎える。

光源氏は「いとうつくしき御孫」の舞姿に(A)「いづれをもいとらうたし」と見た。ところが老齢の上達部たちは(B)「みな涙落としたまふ」という。式部卿宮に至っては孫の舞姿に(C)「御鼻の色づくまで」すすり泣いている。

準太上天皇光源氏は今四十七歳。彼は決して泣いてはいない。「いとらうたし」と感激した。しかし、断じて泣かぬ。これまでの光源氏であれば不覚にも落涙を禁じえなかったであろう。だが、今日はその醜態は決して見せない。四十七歳の今はますます手強くなっている。そんな彼が柏木を追ひ込む次の言葉を吐く。

「過ぐる齡にそへては、酔泣きこそとどめがたきわざなりけれ。衛門督心とどめてはほ笑まるる。いと心恥づかしや。さりとも、いましばしならん。さかさまに行かぬ年月よ。老は、えのがれぬわざなり。」とてうち見やりたまふに……。

光源氏は自分をも含めて「過ぐる齡にそへて……」という。自嘲の口吻で語る彼の言葉は、痛烈な皮肉と化す。衛門督柏木が「心とどめてほほ笑まる」道理がない。恐怖に責めぬかれて身を縮めていたのに相違ない。そんな彼に光源氏の絡み口が「いとよ火を噴く。」「さりとも、いましばしならん」から強烈な皮肉に変ずる。「さかさまに行かぬ年月よ。老いはのがれがたきわざなり」とは、誰もが熟知するこの世の真実。とはいえ、三十数歳の柏木に理解できても納得のいく話でもなからう。それでも柏木はありがたく拝聴していかくはならず、いさかも頭をあげることができない。

『河海抄』には、

さかさまに年もゆかなんとりもあへすすくるよは日ひややいともにかへると古今

との注記が見え、これは『古今和歌集』巻第十七(雑歌上)の「題しらず」とする「よみ人知らず」の歌である。

窪田空穂氏は「人間の命数を思わせられる年齢の人の、過去を顧みての嘆きである。愚かしいことのように、しかも何人も感じさせられる、一般性を持った心である」(注8)と評して、「年が逆に流れてほしい」という積極的に若返りを願望するところにこの歌の生命がある。なお、「とりあへず」については諸説があって解釈の一致を見ないようであるが、

まだ現代語の副詞「とりあへず」のようには固まっていないところで、「とり」は……と「さへる、とりおさえる意と解するの」が最も妥当のようである。(注9)

とされた竹岡正夫氏の解に従えば、歌意は「さかさまの方向に年月も行ってくれよ。取り押さえておく間もなしに過ぎ去って行く年齢が、年月と一緒に返って来るか」となる。所詮願っても叶わぬはかなさを充分知りつつも思いみる嘆きが滲み出た歌である。

右の『古今和歌集』の歌を踏まえた皮肉を光源氏は柏木に突きつけた。しかも「空酔をしつつ」柏木に「のたまふ」たのである。「空酔」は本人の意思による。他者には見きわめ難い。光源氏は他者に対しては酔いを装いつつ、柏木には正気で突きつけたのである。盃がめぐって来ても楽しむ余裕を持たぬ柏木に、盃を「持たせながらたびたび強いたま」う光源氏の姿は、柏木にとってはあたかも「鬼」とでも見えたことであろう。だが、物語は「頭いたくおぼゆれば、けしきばかりにて紛らはす」柏木に「をかし」の美を認めているのである。

柏木には光源氏の眼光が狂気に近い怒りを含んでいると見えたことであろう。それが準太上天皇光源氏の社会的地位であって、彼の微動だもしない権力の証しなのである。私はかつて

あの一言あるゆえに光源氏も人間なのだ。あまり理想的すぎた光源氏が、第二部に至って人間臭さを漂わしはじめる。私は第一部に登場する光源氏の像よりも、第二部の彼の姿により人間らしさを認める。^(注11)

と述べたが、その思いは今も変わらない。

さて、いよいよ柏木は死への道を辿ることになる。物語は、心地かき乱りてたへがたければ、まだ事もはてぬにまかてたま

ひぬるままに、いといたくまどひて……。

と語り、堪え得ぬまで気分悪くなった柏木は、試案の宴果てぬというのに退出し、それ以後「いたくまどう」日を送った。

果たして柏木の病臥が朱雀院五十賀に支障をきたさないであろうか。当然ながらその危惧は時の人々に抱かれていたであろう。だが、二月十余日に予定されていた賀宴は延引に延引を重ねて来たのであり、いまた延期というわけにもいくまい。十二月十余日との決定を見た朱雀院五十賀は、十二月二十五日と再び決定した。

かかる時のやむごとなき上達部の重くわづらひたまふに、親はらから、あまたの人々、さる高き御仲らひの嘆きしをれたまへるころほひにて、ものすさまじきやうなれど、次々にとどこほりつることだにあるを、さてやむまじき事なれば、いかでかは思しとどまらむ。

と物語っている。柏木はいま従三位中納言衛門督。女二の宮の夫柏木が死去すれば、多くの貴族と関わりがあつて御賀にも支障の出ること疑いない。そうした思いの中で二十五日と決定した。朱雀院五十歳の年内に、やつとの思いで女三の宮主催の賀宴が開かれたのであった。

四

恐る恐る引きずり出された形で六条院に参上した柏木は、光源氏の一方的な突きの前に脆くも崩れ去ってしまった。それ以後、まっ

たく枕あがらず、続く柏木の巻は

衛門督の君、かくのみ悩みわたりたまふことなほおこたらで、
年も返りぬ。

と語り出されて、両親のもとに引き取られた柏木は衰弱の進むうちに、近づく死の予感に身を沈めるのであった。

といった、『源氏物語』の作者「紫式部」は、光源氏四十七歳というこの時点において、若い公達柏木に痛烈な一撃を加える光源氏を登場させたのであろう。彼自身かつて柏木と同じ罪を義母藤壺との仲で犯して来た。というのに、彼は四十七歳にも達した今、その罪の許容できぬ怒りにかられている。その怒りは時に噴出することがあった。それは、彼とて抑制に抑制を重ねて来た上での、せん方なき噴出であったようだ。だが、そこにこそ光源氏の人間性を窺うこともできれば、物語自体の深化も見えて来る。

準太上天皇光源氏の激怒は、こうした形で柏木を死に追い遣ったものの、六条院の内部からの崩壊はいかに彼とてとどめる術がなかった。光源氏の怒りの噴出の姿は、いわば彼の最後の足掻きでもあったわけである。「さかさまに行かぬ年月よ」といって柏木に当てこすってみても、目前に迫った老境への恐怖は、彼とていかんともしがたいものであった。そうした焦りが彼にも芽生えていたのである。男性社会におけるこうした争いを、女性作者・紫式部が物語の中にとり入れた手腕はさすがである。ただし、陰湿な感があるのは女性作者ゆえでもあろうか。彼女が見聞した事実をもとにして、いくらかの虚構もまじえつつ描きあげたのが、試案の夜の光源氏の姿で

あった。

(注1) 『源氏物語』の本文引用は『日本古典文学全集』(小学館)

によった。

(注2) 野村精一氏『講座 源氏物語の世界』(第八集) (有斐閣・

二八五頁)

(注3) 『日本古典文学全集』(源氏物語四・二六四頁、頭注一三)

(注4) 『源氏物語評釈』第七巻(四九一頁)

(注5) 注3参照(二六八頁)

(注6) 『源氏物語の古代と文学』(二七二頁)。ただし、「あの密事

を行なった……」から改行している。

(注7) 『源氏物語論集』(二七頁)

(注8) 『古今和歌集全評釈』下巻(七三頁)。なお、竹岡正夫氏は

『古今和歌集全評釈』下巻(八九七頁)で、「現代ふうになら、若いころにもどれるタイム・トンネルでもあったらなあ、という気持」と評されている。

(注9) 『古今和歌集全評釈』下巻(七二四頁)

(注10) 注9参照(七二五頁)

(注11) 拙著『源氏物語論考』(九四頁)